

校長室だより

枚方市立招提北中学校
平成27年10月14日(水)
第15号 電話050-7102-9265
FAX 072-867-1911

全国学力テスト結果

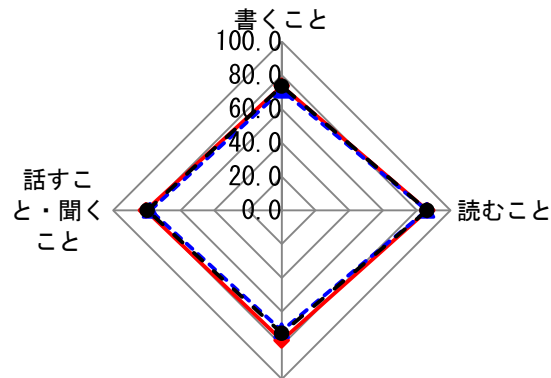
大阪府平均正答率だけでなく、
全国平均正答率を全教科で上回る!!!!

本年4月21日に、3年生を対象に実施した「全国学力・学習状況調査」(全国学力テスト)の成績結果や生徒の学習状況結果が、文部科学省よりもどってきました。

ここ数年間、本校平均正答率は、大阪府平均正答率を上回ったり、一部教科では全国平均正答率を上回るものもありました。昨年度は、大阪府平均正答率に残念ながら届きませんでした。しかし、今年度は、なんと大阪府平均正答率だけでなく、全国平均正答率をも上回りました。このような素晴らしい結果は、これまでの本校の様々な取り組みの成果とともに、生徒たち自身の努力の賜物であると思われます。

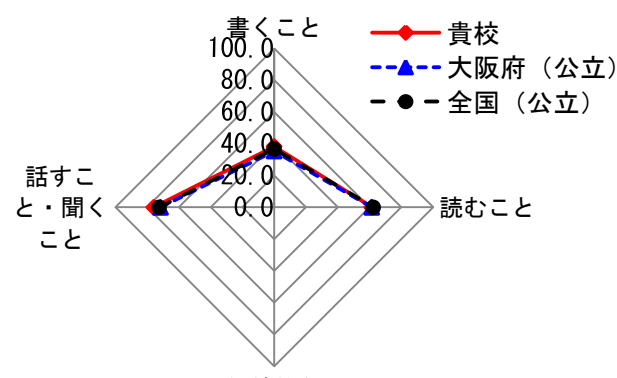
それでは、調査結果を少し詳細にお伝えします。

国語 A



伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

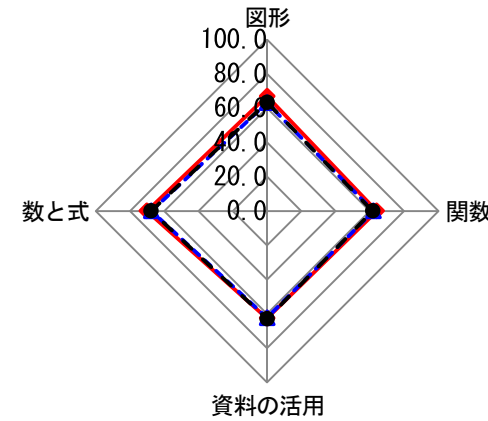
国語 B



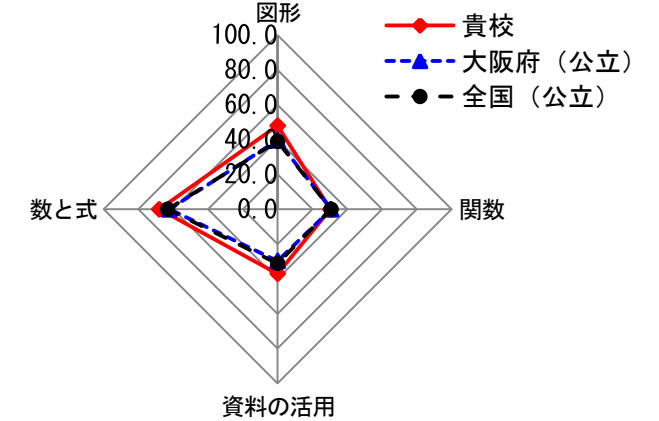
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

(注) 国語「B」の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」についての「出題」は、ありませんでした。よって、国語「B」のグラフには、その項目の表示はありません。

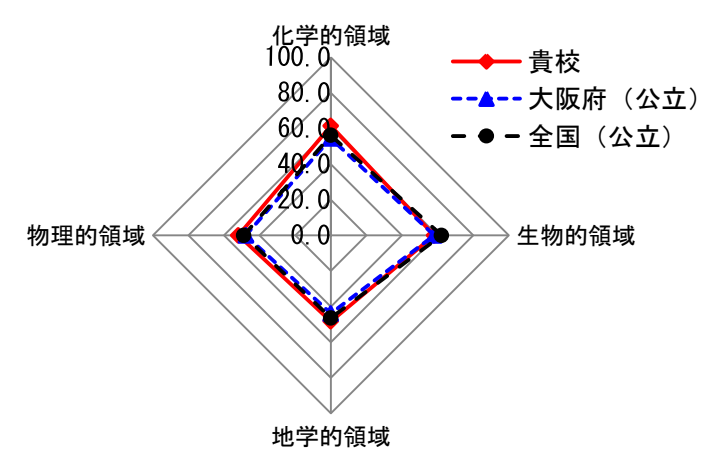
数学 A



数学 B



理科



(注) 国語「A」や数学「A」は、「主として知識」と名付けられた学力調査(テスト)で、基礎基本の問題を中心に出題され、国語「B」や数学「B」は、「主として活用」と名付けられた学力調査(テスト)で、応用発展の問題を中心に出題されています。

1. 教科に関する調査の結果

[国語A]

すべての領域・観点とも、おおむね良好な成績で、まんべんなく基礎的な力がついていると考えられる。また、A・B問題とも無解答率はきわめて低く、真摯な気持ちでテストに取り組んだことが伺える。とりわけ「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」や「言語についての知識・理解・技能」の正答率は高く、漢字・文法等を中心とする言語事項についての知識は、着実に身につけているものと考えられる。

[国語B]

「国語A」に比べると正答率は低く、知識を応用・活用する力をさらにつける必要が認められる。「読む」「書く」「話す」「聞く」の領域別に見ると、「書くこと」の正答率が低い。文章の構成・内容を把握した上で、それについての「自分の考え」を持ち、根拠を明確にして、的確に文章表現する力をつけて行く必要がある。

[数学A]

全体の平均正答率は、大阪府は無論、全国を上回っており、無解答率も大阪府や全国と比べても低かったので、真摯に取り組んだ様子がうかがえる。中でも、「数と式」や「図形」や「関数」の領域の正答率が高く、短答式の問題でも正答率が高かった。

一方、「資料の活用」における領域では、平均正答率が全国より低く、「中央値」などをはじめとする、数学的用語の知識が少ないと思われる。しかし、「確率」の問題における正答率は高かったので、第1学年で学習する「資料の活用」の領域を復習する必要があると考える。

[数学B]

数学Bも平均正答率が、大阪府は無論、全国を約5%上回っており、また、記述式における問題の無解答率が低かった。数学Aと比べると正答率は下がるものの、自分なりの解答を書いた生徒が多いと考える。

「図形」の領域における問題については、全問題で大阪府や全国より平均正答率を上回った。しかし、「関数」の領域では、5問中3問が大阪府や全国の平均正答率を下回る結果となり、さらに、正答率の低かった問題の多くが、「数学的な見方や考え方」の観点に関するものであった。どの領域においても、基礎・基本の定着を図りながら、「数学的な見方や考え方」を培っていく必要があると考える。

[理科]

「生物の領域」と「自然事象についての知識」の問題が、少し悪かった程度で、その他の領域全てで全国平均正答率を少し上回っていた。正答率が良くなかった問題を順に挙げると、「天気図の読み取り」や「デンプンの分解でできるもの」や「目の構造についての知識」となっていた。逆に、正答率の高かった問題は、「濃度の計算」や「湿度をグラフなどから読み取る」や「音について」や「化学式」であった。

また、正答率が良くなかったといっても全国平均正答率から数%程であった。それに比べ、正答率が高かった問題は、最高で16%と全国平均正答率よりもだいぶ高かった。

つまり、細かい知識で復習不足が見受けられるものの、科学的な計算やグラフを読み取る力は、しっかりと身につけていると思われる。実験の結果を読み取る力が身につけているのは心強いが、物質の名称や理科の記号や用語などについての知識理解が、今のままでは不十分と考えられる。

2. 質問紙調査の結果

[学習習慣]

昨年と同様、多くの生徒は、基本的な生活習慣はだいたい身につけている。テレビや携帯電話やスマートフォンやネット利用、ゲームにかける時間は、全国や大阪府と比べ長くはない。

また、塾に通っている生徒の割合は、全国や大阪府と比べ少ない。その分、学校の宿題をしてくる生徒は多いが、授業以外での学習時間は、全国ならびに大阪府平均より短く、自主的な家庭での学習習慣が身につけていないことがうかがえる。

[学習等に対する意識]

全国や大阪府との比較では、昨年と同様、困難に立ち向かう力や達成感を体験している割合が高く、自己肯定感も高い。また、図書館や学校図書館を利用するなど、読書習慣は根付いているが、読書好きな生徒は多くはなく、新聞を読む生徒も少ない。

しかし、ニュースなどへの関心はあるようで、携帯電話やスマートフォンのインターネットで見ている生徒が多い。

3. 分析結果を踏まえた今後の改善について

今回の学力調査結果では、国語、数学、そして理科の全教科ともに、大阪府平均正答率だけでなく、全国平均正答率を上回った。この学年においては、一クラスの生徒数が少ない上に、数学においては、2年間の少人数習熟度別指導を行うなど、生徒一人ひとりに丁寧かつ手厚く指導することができた結果である。

また、理科においては、小学校6年生からの中学校の教員による専科指導の賜物であり、小学校から中学校にかけての一貫した指導の有効性をうかがわせてくれた。

何より、今回の学力調査結果からだけではわからないような、この学年が特に力を入れてきた「提出物を期限内に全員が出すこと」や普段からの「見る・聞くの徹底」は、重要な教育的要素であることがわかった。

しかし、課題も多く、携帯電話・スマートフォンやネット利用、ゲームにかける時間の問題は、夜更かしに代表される基本的な生活習慣の乱れやラインやツイッターに関するトラブルの明確な原因になっている。

そんな状況の中で、活字離れの様子もうかがえ、「書く」ことや「読む」こと、そして「考えること」へのこだわりが希薄化しているように思う。そこでは、やはり「言語活動」が大切であり、全教科の授業においても、「言語活動」を伴うような授業を行っていく。

また、どの授業においても、導入時に本時の「めあて（目標）」を明確にし、終末時には必ず「振り返り」を今まで以上に行っていく。このような生徒自身が学習の見通しを持てる授業を、今後もより一層取り組んでいく。

以上のような、生徒の生活・学習状況の課題点や問題点を、全教職員で情報共有し、把握をし、学校生活や家庭生活の指導や改善につなげ、生徒の学力向上を今まで以上に図る。